2378
18

遠
2378
18

契情の松 宮女の桜

操競雙生渡

文化巳己新鐫

山東京山作 全六冊

歌川國貞画

儒鶴堂發行

乳母おちのひと
小餘綾のお磯
むさし太郎が妻
人間美謾
落花の為
明年依旧用

馬走る
青竹の五本六
船頭ぜんとう
辻水の吉
むさし太郎
時国

荒熟鳥
親の罪
外口ゑ

放し鳥
隠徳の
半沢六郎

朝露

陽報
半沢六郎成清

叙言

ひゐんをつゐてゐりけをきりて子どもしゐりゐくぶそうとしむべし　文化五年四月　全部六冊脱稿

文化五季 京山乃作 十七部之一

一日玉川ニ遊びて金井の桜を賞じ酔節ニ道を失ひて恋が窪といふ孤村ニ迷ひいりて偶南郭翁が

恋が窪の契情の松の作をおもひだし松を尋て一観せしに千古の琴韻風裏に聞ゆ南郭翁が金言句ニ松の緑の色を増てむかしをおもひきさ夜ニ一胸節をたてゝなぞ時をうつし筆おらそふ鳥ニおどろきて此夕は六所のそこざやニ泊りて南郭翁が契情の松の説を按ずるニ恋がむかし鎌倉海道の駅長傀儡女あまたありける中ニ朝妻といひしは畠山庄司二郎重忠が馴染なりし女郎也治承四年の春重忠佐殿ニしたがひ上京せしニあさづま重忠が戦死ありしといふそらごとを実としてなげきのあまり一株の松のもとにて自害せしを重忠佐殿ニしたがひ度々のせんじやうニ武功をあらはし年をこえて帰りし朝づまがうせしときゝてふびんにおもひ菩提のためとて鉄の弥陀仏をつくらせ朝妻が死せる松のもとに安置せりこれよりのち里人らかの松を契情の松とも操の松ともよひてあさづまが貞心をあめけるさぞ重忠の美男なりしことは盛衰記にものせたればあさづまがしたひしもことわりん鉄のこぞ仏は今なお六所明神の社内にありて仏像に鋳つけたる文字建久藤原といふ四字のこれ

ゆゑあり南郭翁ハ里人の口碑ゆゑ[illegible]と詩ふ賦とーゐるべー鉄仙の今の世まで[illegible]ふ契情の松のあるを謂ふ似ゐる氏書ハ契情の伝のみどりふ[illegible]女の樹のあざを載せ(翌生の医のをのりふ筆の掉をして色をべて玉川のあうちをさすと刈あり)一部の[illegible]をつゐ松の緑のつしをゆ書の禁千歳弓仙雀堂の賣初めふひさ臣む

○こゝとゐうゐんのむじめ

造端ゐうゐん むじく

武州多麻郡布田の里ハさらとゆさゆのあさつゆとえみーめいゐーみーてまりしゐ公のゐろハゐのちゆゐゐうゐつゐのゐゆくゐゐうゐつゐのゐゆくゐゐゐゐゐのこゐゐゐゐゐゐくゐゐくゐゐくゐゐゐゐゐゐ

ふるさと
ひろこれとろあさまるよおさろめ
まてまとのあやさめぐりあふまり
あろありのろきのんぐろとをあるあり
のふくゝ
かりや
そのさとをのぐゝ
つれあくゝも
つきまゝひて
うくゝこを
あまと
ぎやて
うめゝや

ろこねぐろやよとちぐのあふかゝたるらそおりとおろ
こふのろぐさのうまれまてそのあをを
おいそとゝあひてみやらさちくま
まぐれひもやさゝきのあり
をつとのあをもこのろぎの
ゝやしありしぐたぐのま
ろろ木の松と梅さろきの
やゝのところびねよとで
ゐゝねあをとあり
くればあをまよ
いざあのれゝやの
ゝこをうけあち
ゝらそのくちでのろも
ゐまひつのよむ川の
ゝとりまとゝてうつゝひの
ゝやしとありつゝもむらひも
ゝまれえてくありゝらく
らしくるゝ
あのそぐらみくるま
七夜もたくね
うちうゝ
ゆあとね
ぐろやへうえま
まゝくるあり
あをあおろあのそを
つれてひさゝへけ
さくりくるゆあま
けあのあをあとあご
さんとところのゆもたくゝれて
あいけみとゝのくれてもくんくゝでのり
たてひきまもあとへひくねをとこあり
さあれよ
ゆろまく
えくを
しまく
あぐろさん
あふのろ
ござり
ますよ

さてもあいたいあざさうをせをくい
こぐやをさつていそぎつて玉川の
つゝみよさつくるこのほいはあるあれば
月のでーかの八ちまさてぎをてく
吉蔵がよあみよりのてるをそれめ
ふえつけるをあげそよぐいりつく
えゑくくとさーまねげば吉蔵い
大きくよあやゝあのこあいたーくま
あのこうぶっといさでひとりこの
へんさまよふいてろえぞとうち
りけーるあゝをえがりうぞこを
せろこてろをあゝきろてこざ
こてろ作のめこへふねをよせ
てうのいなどえどのーうちのひ
とこくころよあいてこやろこで
つれもあくこるまあこざろどあを
ちをひきころーしいころえぞど
やうこといろよとなぐぬれども
あのこいるんのいくもせざど
かれこるうーぞふゝこうけて
ふるよこびのりあこざろを
ぜるこりあろーやれくられーや
やくくころがあちつくこと
ひるまであろこそうしろの
うこいぞんのこもめの
つゝみのこくころうあの
うちへとびころりやいるま
あいこをふゝつけて
うこあるまををうけ
さいぞんあのれまこが
うれをこんあぞえられ

いけてあいてこいころ
ざろりうどひろげと
二えんすあぐねづろ
まぞにあやうくこんえ
ろところよさそくの
吉蔵りゆひのさをを
ねきこりてうこさき
うけてこうとうこう
うこれてふとよこらひ
ぎりさををぷつきと
こりおられさんこの
竹ゆりとついてこるを
身をうをやこきりつくろ
たぐいのこやこざ
りこまのひろ月の
ひろうみのひろと
あろこまをこらあきと
ろこるありこさまへ
目ざあーこりろるこ
うひありうのこをりの
吉蔵がこあうふとり
をつきぬうれまこのこらく
まろこさろーまよ
あちのりてころまくこの
ひきりひまこぞこへ
えゑぞとありまりり
あこうまつぐこーてーこの
りの吉蔵こえをこーこき
あやあそれるんこりつく
りのへるうりりり

春琴

金百足
金三百足
青河十貫文
八角
丸
五
九

かくてめさりハ山ざらのたわふれ[illegible]

[illegible]

「ヤアおんぢの吉蔵が[illegible]竹の[illegible]

吉蔵[illegible]川中へおちの[illegible]

[illegible]百年[illegible]

[illegible]八角まろ[illegible]

[illegible]

[illegible]吉蔵[illegible]川[illegible]

[illegible]八角[illegible]

[illegible]武兵布田の里[illegible]

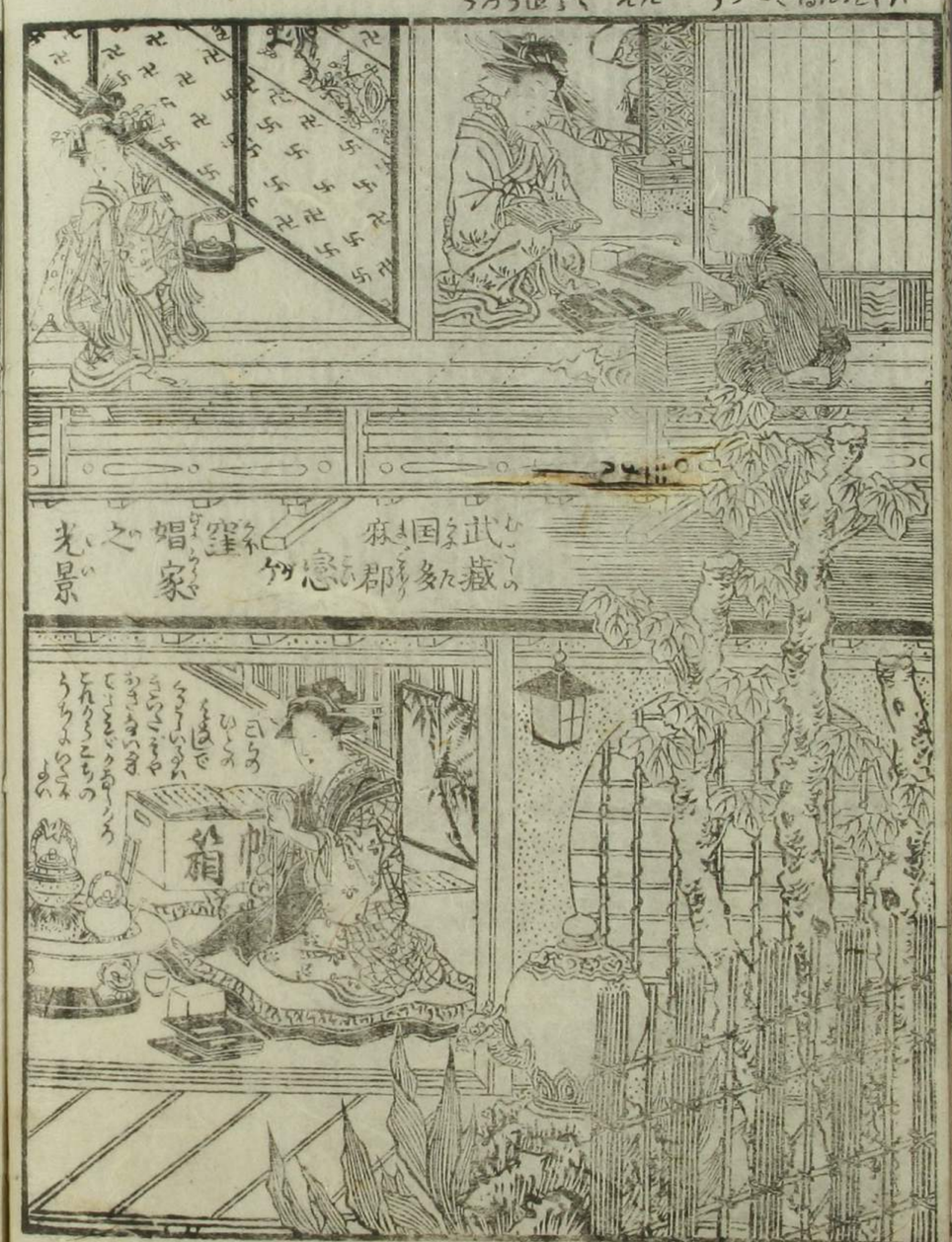
吹けぼく

八角九[illegible]

村のりの者のをのつふ
りちんたがは吉兵がるびたへ
のふもさうろりあさうにろり
のくくまであくごのあいう
をりはたしぬ吉兵へ
村中がさてれるるねぞ
にげろく
京山作あごぼし
浦三郎
あるくさ出たん
仕ゐれものさ
おとりたそ
おあどたく
ぬれの
作者と
おが
ごひろ
ぐんの
あぐ
いくくま
ゆぶび上
たそ
まろ
ん
吉
アサヤえ

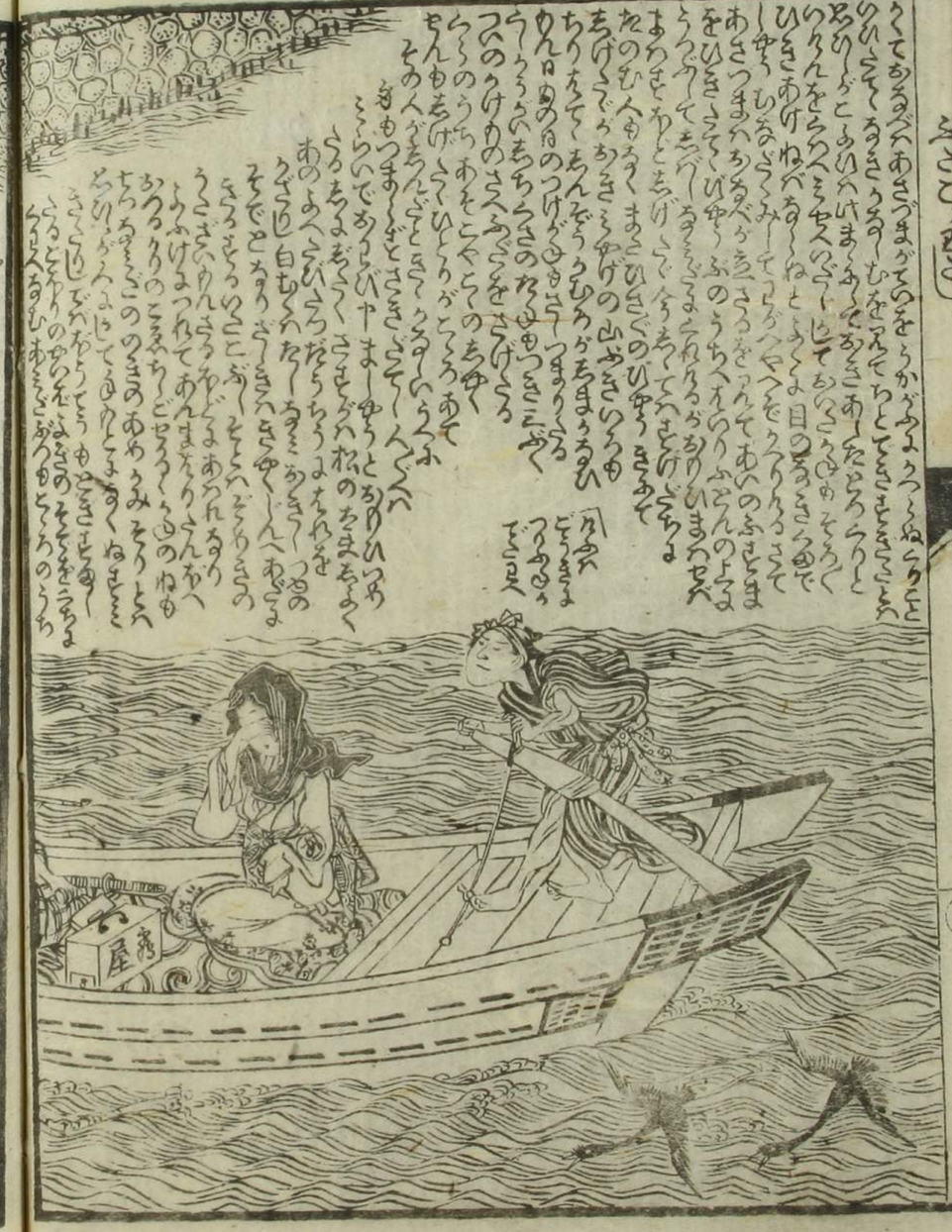
山東京山作
歌川國貞画

双生渡り石の編三冊の之始


武蔵国多摩郡
窪川
遊廓
娼家
之
光景
箱

桐

十六のさるまなびのさぶらこと



ちげんぬくの
まんなぐ

これまでの
りんがをぞと
わきうへつのま
ろぶくきとるのしい
ふんなる
ものをてい

やこけ
ゐかとの
ちりふく
ゐるぐ
ゐくんて
ぐさん
まとさん

あさづまの

あさづまの

あさづまの

つゞき　けふはあげくでうアもよーやくへとものあられ
さるゝくたぐひのゐのうくをくろうつひとまを
わとろるゞこのよアもよーやくのあくろちろき
りくふねもくへのりふげやくところをまざハ
ありうく用るゞあつてとろりありセあゆき
らセめのとくんて引ゞくへたんぐとちんきセゞ
これをゑのちゝの八角九がてくゝのめのゐり
々れべこれふあんゐいさセあーくくのゐちく
八角九ゐゆくれくゝもけくゝでたゞゐうたんさハ
おうふげくゐの表紙あさろまゆろとも
アもしくゝをくしてきろへくゐゐ八角九ハ
ぬくゝくゐのふげれゝていさきをくゝきを
てきくくくくしくこあゆさうちろくれ
そのゐもとろゐよのさろをうけつゐま
あさづまゝくゝあふとさばくゝをつゐれ
こくうをつくむおんまくまこくちよゝ
ありさまゐりくくて竹ゐのちけくゞゑり
よりとゐあゆやあけくゐるをよくん
あくゐあくくをあさろまハちけくでう
つまふくゐゐくれば
あくくゝめてろう
けんとき表紙ハ
々くゐのよくへ
えんさろゐ
めゐんをくまゐ
りくくふ
ちけくであさ
つまゝゆくゝ
あしこのゐ
あゆくまろけ

讀本

頼豪阿闍梨 怪鼠傳後編 全部四冊 曲亭馬琴作 葛飾北齋画

契情奈良茶屋 操競雙生渡 山東京山作 歌川國貞画 全部六冊

三峯御霊験 狼之助太刀 十返舎一九作 勝川春亭画 全部七冊

小女郎蜘蛛環 曲亭馬琴作 勝川春亭画 全部十二冊

荒出長茂五郎金時半兵衛 志道軒昔講譯 山東京傳作 歌川豊國画 全部七冊

文化巳春新繪双紙

右残らず板元 江都通油町 鶴屋喜右衛門版